

ケネデイとガウデイ

——辞苑閑話・八——

工藤力男

再開の弁

「辞苑閑話」と題する連載エッセイを、その七「文語は遠くなりけり」で閉じたのは、三年前の本誌二百廿九号(20112)においてであった。

文献にたどることのできる日本語の歴史は二千年に満たないが、それでも年々歳々の変化で、塵も積もれば云々の結果になる。日本語の歴史を考えることを努めてとして生きてきた自分は、そうした変化に一喜一憂することはない。だが、とんでもない新しい言葉や珍奇な表現に触れると、なぜそう表現するのかと考えるこぼれしてしまう。その衝撃が大きいと、まるで一方通行の車道で、反対方向から向かって来る車に出遭ったような気分になる。そうした経験

も回数が多くなると、次第に慣れて違和感が薄らいでゆく。それが消えたとき、その新しい表現が日本語社会に定着したことになるのだろう。

違和感をいだけ語や表現もさまざま、その感が続く期間もまちまちである。例えば「食べれる」類のラ抜き表現化は、百年以上も前に始まってなお未完了である。これが完了するのは何十年先のことだろうか。この変化が、日本語の表現の自然な変化の過程であることは、本誌百九十二号の「たが保存せしマンモスの脳——言語時評・八——」(20059)に書いた。反対に、「全然おもしろい」のたぐいは好きではないが、これが必ずしも新しい表現ではないこと、ゆえに目の敵にすべきものではないことを、「陳述の

ゆくえ——辞苑閑話・三——と題して本誌二百廿五号(2013.12)に書いた。

それに対して、「熱中症」「夜の初め」「立ちあげる」「おゝただけです」などを、わたしは拒否する。理屈に合わない語形であり用法であって、そのように変化する必然性は認めがたいからである。だが、我が思いとは裏腹に日本語社会に住み着いてしまったことを、わたしは嘆いている。

わたしは既に研究環境から遠く離れてしまったが、今の日本語に触れて感じたことについて少し書いてみたい。能うかぎり簡潔な記述を心がけて、老人の繰り言で貴重な誌面を徒らに塞がないようにするつもりである。

ギョエテとは俺のことかとゲエテ言ひ

この見出しも旧稿に用いたものだが、これが齋藤緑雨の戯句ざいくだということを知った。いかにも彼の作りそうな句である。

外国語を日本語に摂取するに際して、特に翻訳できない固有名詞は、日本語の音韻体系に合わなければ、その表記に苦勞するのは当然である。その一端を、明治十八年に書かれた、坪内逍遙『小説神髓』上巻の巻頭の二節、「小説

總論」「小説の変遷」から引いてみる。①「ナルレチイブ。ポエトリイ」、②「魔まイソロジイ」、③「浮うへイブル」が、わずか甘ベイジに満たない箇所に見える。①は「物語歌」、②は「鬼神史」の漢字表記を伴っている。③は「寓言の書」の謂いで、わたしたちには「ファール」で親しいものである。これは文学論の専門語に属するが、文脈なしでは判断できないので、少し極端な例かもしれない。

明治廿年刊行の『新体詩抄』を見ると、「沙翁」とも書かれたShakespeareが、「シエーキスピール」(、山居士)と「シエークスピール」(尚今居士)で並んでいる。『小説神髓』に載る坪内逍遙訳『ジュリアスシーザー』の広告では「セキスピア」とある。

第二次世界大戦後、日本ではさまざまな国語政策が実行されたが、外国語の仮名表記法については緩やかであった。まとまったものは、昭和廿九年三月の国語審議会報告「外来語の表記」、平成三年六月の内閣告示「外来語の表記」だけである。それも、制限の性質が弱く、慣用を大幅に認めるという姿勢が採られている。そこで、自分の慣用に合わない用例に遭遇して当惑させられることになる。

いま、文章を書くことをなりわいにしても、片仮名語の

表記に神経を使う人はさほど多くはあるまい。雑誌類の編集者や報道関係者が主な職種であろう。その他の職業人はかなり我流に書いているのではなからうか。そのような人は、時に自分の流儀ならぬ表記に遭遇したら不審に思うに違いない。本稿では、そうした外来語の表記と読み方に関わる小さな問題を考えたい。

ケネディの不思議

前節末に書いた不審感が、十月廿七日、ほかならぬ自分に生じた。アメリカの第三十五代大統領だったJFKの暗殺に関わる機密文書公開の報道によってである。

この日、NHKテレビ十九時のニュースでは、画面左肩に項目を「ケネディ暗殺」と掲げて報じた。担当の鈴木菜穂子アナウンサーの発音では、終始「ケネディー」であった。語末が、字幕では短音「ディ」、口頭では長音「ディー」で、表記と音声が異なったわけである。あとでネット検索して標題を見ると、筆頭はウィキペディアの「ケネディ大統領暗殺事件」であった。そして、上位十件のうち、短音「ディ」が八件、長音「ディー」が二件、両形の見えるものが二件であった。なお、卅一日午

後、BS1の「海外ニュース」の同時通訳の音声は「ケネディ」であった。

語末がKennedyと同じ形になるほかの英語からの教語について『広辞苑』第六版によって調べてみた。日本語として四拍未満、中に長音を含まない語形で探して得た、candy・dandy・handy・melody・parodyを見ると、語末はすべて「ディー」、すなわち長音形で掲げられている。短音形「ディ」で終わる語は見えない。

ついでに「ty」と綴られる英単語についても調べてみた。community・quality・reality・safety・varietyは、一様に「コミュニティ」など「ディー」であって、「ディ」どまりの語は見えない。手元の他の二三の辞書によっても同様である。これは何に由来するのだろうか。

まず考えたのは、日本語への導入時期である。そこで、若干の語について語誌を調べてみた。『日本国語大辞典』第二版によると、candyの初出は明治三十七年、報知新聞の「キャンデー」であり、続けてキャンディー、遅れてキャンディが見える。ちなみに、わたしなどが少年時代に口にした氷菓子「アイスキャンデー」は登録商標なのだという。dandyについては、ダンディからダンディ、ダン

デイーと続く。comedy は坪内逍遙『小説神髓』の「古メ
デイ」が早く、コメデーそしてコメディとなるらしい。
parody は、鷗外のパロヂイ (1913)、佐藤春夫のパロヂイ
(1950)、中村真一郎のパロヂイ (1957) という流れがた
どれる。

『広辞苑』は、右の諸語の標準形を「〜デイー」「〜
ティー」としているわけだが、これは日本における外来語
表記の変化の経過を反映しているのではあるまいか。

三拍語「レデイー」について、石綿敏雄『日本の外来
語』(岩波新書 1986) は、昭和十年の『万国新語大辞典』
に「ヤングレデー」が収録されているという。その半世紀
後に創刊された女性週刊誌は短音の『ヤングレデイ』であ
るが、今は長音の「レデイー」が一般的である。

この十二月一日、NHK-FM 放送の「オペラ・ファン
タステイカ」で、Verdi の歌劇「ドン・カルロ」を聴いた。
案内役の奥田佳道さんは、作曲者名をいつも長音形「ヴェ
ルデイー」と言っているように聞こえた。なお、役名「ロ
ドリーゴ」の語末のゴの頭子音は、鼻濁音と非鼻濁音がほ
ぼ半々であったと思う。奥田さんは東京都育ちの人であ
る。これに味を占めて翌週の八日も聴いた。案内役は室田

尚子さん、曲目は「ルクレチア・ボルジア」。作曲家
Donizetti は、終始「ドニゼッティー」であった。十二月
六日のNHK-FM 放送の「クラシックカフェ」では、案
内の粕谷紘世さんのVerdi も「〜デイー」と聞かされた。
放送者や朗読者は、原稿の文字よりも、自分の語感すな
わち日本語の語感に忠実たらんとするのだと思う。

長音と短音

右のことについてかれこれ考えていた十一月一日、
NHK ラジオ十九時、名古屋放送局からのニュースで、
名古屋大学東山キャンパスに「ジェンダー・リサーチ・ラ
イブラリ」の開館したことが報ぜられた。いわゆる文庫判
より少し縦長の判型、「平凡社ライブラリー」、岩波書店の
「同時代ライブラリー」などに親しんだわたしには、「ライ
ブラリ」はいかにも寸詰まりに聞こえる。そして、わたし
の机辺にはこの形で掲載する国語辞書はまだない。

同月廿日、朝日新聞電子版は「国産量子コンピューター
試作機、無償公開へ 改良目指す」を配信した。そこに出
現するこの語は、四回とも「コンピューター」であった。
同日、NHK ラジオ十九時のニュースでもこれが報ぜら

れ、語末を、男性アナウンサーは「タ」、女性アナウンサーは「ター」と読んだ。

読者諸兄の中には「いまさら何を」とお思いの方も多いだろう。ITやコンピューター関係の文章、英語文献に接する機会の多い人は、語末の長音がまだるいこと甚だしという。そのきもちはよく分かる。

先に引いた、平成三年の内閣告示「外来語の表記」のⅢ「撥音、促音、長音その他に関するもの」の3「長音は、原則として長音記号「ー」を用いて書く。」への注2に左記のようにある。

英語の語末の *ph, to, at* などに当たるものは、原則としてア列の長音とし長音符号「ー」を用いて書き表す。ただし、慣用に応じて「ー」を省くことができる。

〔例〕 エレベーター ギター コンピューター
マフラー

エレベータ コンピュータ マフラ

少し古いが、朝日新聞の「ことば談話室」という小さなコラムに、「コンピュータ(上)」と題した「長音符号 慣用で省略も」という文章がある(2005.7.31)。工学系の分野

では戦前から長音を省く慣習があったという。パソコン関係の雑誌を多く発行するアスキー社では、雑誌によって表記を変え、専門的なものほど省略傾向が強いのだという。それもよくわかる。

雑誌『言語』第十卷十号(1981.10)は「コンピューター」と言語「特集であった。その編集後記によると、執筆した八人の用語は一律に「コンピュータ」であったという。

わたしはその「モータ」や「ドライバ」などが好きにならない。先日、親会社再建のための売却が報道された「東芝メモリ」は、物差しの会社かと錯覚した。これらは、生半可な知識では対応できない恐れがある。十年前、名古屋放送局からのラジオで、デンソーという会社の社員が、コンピューターからデータターを盗んで持ちだした疑いがある、と報じた。「データター」を数回耳にしたのである(2007.3.17)。アナウンサーの名も記憶しているが、「データ(data)」がラテン語 *datum* の複数形とは知らずに、*dator* か *dator* とも勘違いしたのでろう。

そうしたことを避けるためにも、長音記号の省略表記には賛同しがたいのである。

日本語音韻史から

日本語史の通説では、古代語のタチツテトは $\text{ti} \cdot \text{to}$ 、 $\text{ti} \cdot \text{te} \cdot \text{to}$ 、ダヂヅデドは $\text{da} \cdot \text{di} \cdot \text{du} \cdot \text{de} \cdot \text{do}$ であったとされている。それが次第に変化して、十六世紀末のキリシタン文献には、一般に $\text{ta} \cdot \text{chi} \cdot \text{ku} \cdot \text{te} \cdot \text{to}$ として $\text{da} \cdot \text{tsu} \cdot \text{de} \cdot \text{do}$ と綴られている。ポルトガル語の綴りに準拠したもので、チ・ツとヂ・ヅが変化している。チ・ツは現在の発音に近いものだったようだ。そして、ヂの綴り di の発音は $[\text{dʒi}]$ であって $[\text{di}]$ ではなく、ツの綴り tsu の発音は $[\text{dʒu}]$ であって、 $[\text{tu}]$ でも $[\text{zu}]$ でもない。

今、ダ行音に限ると、古代日本語にはあった $\text{ti} \cdot \text{tu}$ が中世以後は消えてしまったが、 $\text{da} \cdot \text{de} \cdot \text{do}$ は古代語のままに残っている。言わば古代のダ行音のうち、チ (ti) とヅ (tu) の箇所は空白なのである。譬喩をもって言うくと、アパートのダ行階の五室のうち、 ti と tu 、二つの部屋が空いている、すなわち音韻体系の「あきま」になっているのである。タ行音についても同様で、部屋を求める人があれば、いつでも人居させることができる。parody のデイ、reality のティなどは、その「あきま」に入居しているのだと言えよう。わたしたちが「ティーカップ」「トゥーアウ

ト」もさほど苦勞なく言えるのは、日本語にもともと存した「 ti 」「 tu 」が復活したに過ぎないからである。

前節で見た、アナウンサーや音楽に携わる人たち、そしてわたしは、外来語の「 ti 」を「ディー」と読んでいる。広辞苑を初めとする国語辞典もそれを標準的表記としている。だが、米国の故大統領が「ケネディ」なのはなぜだろうか。

先に見たように、キャンデー・コメデーなどは、比較的早く、明治期にはいった語である。そのころは、これでも精いっぱい外来語めかしたのである。次第に外国語にもなじむようになってコメディー類が定着し、それが標準的な表記と考えられたのだろう。

一方、Kennedy は廿世紀後半に米国の大統領として登場した人名である。そのころは、外来語の発音も原音に一層近づけようという意識が強くなっていたのではあるまいか。それが、語末を伸ばさない発音・表記を生んだ、わたしはそう考えている。

角度を変えて眺めると見えてくることがある。handicap は「ハンディキャップ」のほかに省略形の「ハンデ」「ハンデー」ともに行われて、前者が優勢である。以上に言及

した語について自身の発音を内省すると、それが語頭か語中にある「ディスク」「メディア」などには違和感がない。だが、語末でむきだしの形になる「〜デイ」は伸ばしたくなるようだ。この類は、中世以後の音韻変化で和語に生まれた「ミュ」にもあって、「マスコミュニケーション」の略語は「マスコミュ」とはならず、「マスコミ」で定着した。

思うに、右に書いてきたように、「デイ」は、中世以来の四百年間、日本語史の日陰にあった拍、近代に復興した拍である。先の譬喩を再び用いると、ダ行階のあきまの入居者が、一人で外出することを避けているのだと言えようか。

ガウデイとケネデイ

去りし七月に上梓した『季語の博物誌』（和泉書院）の十二月十四日条は「くしやみ」である。その例句の一つに次の句を掲げ、「字足らずのまま引いた」と附言した。

大きくさめガウデイの城揺らしけり 佐川広治

この句は講談社刊『カラー版新日本歳時記』から引いた。

右の附言の意味は、わたしの日本語で「ガウデイ

(Gaudi)」は三拍語なので、中七には助詞「を」を入れて、「ガウデイの城を」としたいということである。この句の作者はこの建築家の名を、「ガウデイ」と書きながら、四拍に読んでいたのであろう。

Kennedyにも似た事情があるのではない、そう考えて、BBC制作のDVD「NASA・宇宙計画」を観た。四枚のうちの「1 人類初の領域へ」の前半ではアポロ計画が見られた。その成功の場面では、この計画の提唱者である当の大統領の姿が現われ、日本語のナレーション「ケネディー」が四回、明瞭に聞かれた。

講談社の『昭和萬葉集』の巻十四には、ガラス事件の報道に関わる歌三首が見える。次に掲げるのが、その連続する三首である。作者名の下の小字は、生年、掲載した会誌・歌集、発行年である。

木下美代子 明42『裸木と三日月』（昭39）

銀杏落葉の上に散りたる号外にケネデイはまだ生きて
笑へり

翁 たつ子 大5『潮音』（昭39・9）

色褪せし世界地図張り替ふべしケネデイ斃れネールい
ま亡し

阿部 太 明 37 『阿部太歌集』(昭50)

議事堂の階下りくるケネデーの枢捧げ持つ中に黒人兵ひとり

特に第二三首の破調が著しいが、Kennedyを含む句は定型である。そして、一読して明らかのように、Kennedyは、すべて四拍の日本語として詠まれているのである。

片仮名は、日本語の語音を正確に写すべく生まれ、用いられてきた文字である。だが、本稿に述べたような事情のあることも認識しておくべきであろう。

(2017.12.12)